応用生態工学研究会ニュースレター　Ｎｏ．１１

Ecology and Civil Engineering Society（ＥＣＥＳ）

2000年（平成12年）６月30日（金）発行

〔発行所〕応用生態工学研究会事務局：〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail：see@blue.ocn.ne.jp

〔発行者〕応用生態工学研究会（編集責任者：幹事長 谷田一三，事務局長 熊野可文）

第１１号　目次

はじめに

１．第11回理事会報告

２．仙台基礎講座開催報告

３．琵琶湖大会開催案内

（第４回総会･研究発表会、琵琶湖現地見学会等）

（公開シンポジウム『健全な生態系とはなにか－評価と回復のために－』）

４．奨励研究募集

５．会誌編集委員会報告

６．いろいろなニュース

新著紹介

７．事務局報告

はじめに

平成12年度（2000年度）は、５月26日仙台基礎講座「水域の環境改変と生物群集」ではじまりました。

５月30日の第12回幹事会及び６月16日に開催された第11回理事会において、平成12年度（2000年度）の事業計画案及び予算案が審議され、活動方針が決められました。

下記のように、琵琶湖大会、公開シンポジウム、基礎講座の開催および奨励研究の募集等を始めます。会員の皆様の参加をお待ちしております。

１．琵琶湖大会開催、一般講演募集！･･P.6～7

開催日時：2000年10月７日（土）～9日（月）

会　　場＝滋賀県立琵琶湖博物館・琵琶湖現地

第４回総会：10月７日（土）13:30～14:15

第４回研究発表会：

10月７日（土）10:00～8日（日）17:00

公開シンポジウム『健全な生態系とはなにか－評価と回復のために－』：

10月７日（土）14:30～17:30

琵琶湖現地見学会：

10月９日（月）琵琶湖竹生島、姉川人工河川見学

・第４回研究発表会における、一般講演の募集を開始します。

（研究発表会一般講演申込受付期限　：７月31日）

（研究発表会一般講演要旨提出期限　：８月31日）

（総会･研究発表会参加申込受付期限：９月10日）

（公開シンポジウム参加申込受付期限：９月10日）

（琵琶湖現地見学会参加申込受付期限：９月10日）

２．会誌「応用生態工学」投稿論文募集！･･P.8

（３巻２号原著論文原稿締切　　：７月21日）

・３巻２号（2000年11月末発行予定）

特集企画「魚道の思想･機能評価･今後の魚道の在り方」

・４巻１号以降（2001年以降発行）

特集及び原著論文依頼

「多自然型川づくりの評価―今後の河川管理のあり方」

「里山とビオトープ考」

「河口堰の評価」，他

３．奨励研究募集開始！･･････････････････P.7

2000年度の奨励研究募集を開始します。

（奨励研究募集締切：７月31日）

４．札幌開催準備進む！

来る９月23日（土）・24日（日）に、応用生態工学･現地ワークショップin札幌「多自然型川づくりーその評価と今後の展望―」として、札幌で河川の現場を見ながら各方面の方々（行政、実務者、市民、生態専門家等）で議論をするワークショップを開催する予定です。近々の内に開催及び参加募集の連絡をしますのでよろしくお願いします。

５．実行委員募集！

札幌、関西・大阪、中部・名古屋等各地で開催する行事では、地元に研究実行委員会を設けて計画及び準備・運営しております。会員の皆様の「実行委員」参加をお願いします。

６．会員募集！

応用生態工学研究会のさらなる発展を目指して、新しい正会員・学生会員・賛助会員を募集しております。ホームページに入会手続きが掲載してあります。（http://www.ecesj.com/）

１．第11回理事会報告

2000年５月30日（火）の第12回幹事会を経て、６月16日に第11回理事会を開催しました。以下理事会での審議・決定事項を報告します。

日時：平成12年（2000年）６月16日（金）
13:30～17:00
会場：麹町会議室
出席：川那部、廣瀬、山岸、石川、江崎、國井、小林、玉井、辻本、鷲谷、谷田（幹事長）、熊野（事務局長）

Ⅰ．報告事項

1) 事務局体制

事務局長熊野可文氏の、２年間出向延長（平成14年３月31日まで）について、(株)建設技術研究所と応用生態工学研究会との間で３月22日に覚書を交わす。

2) 一般経過報告（略）

Ⅱ．審議事項

1) 平成11年度決算報告（理事会では承認、詳細は第４回総会にて報告します）

――以下、平成12年度――

2) 名誉会員推薦

(1)名誉会員の、選挙権・被選挙権は無いものとし、会誌・ニュースレター等事務局からの各種連絡・サービスは受け、会費は無料とする。必要な細則等の改正を検討する。

(2)第４回総会に、名誉会員を推薦する件を具体的に検討する。

3) 国際交流（海外学会への派遣）

(1)今年、7月にフランス･ツールーズで開催されるEISORS（流況制御河川に関する第８回国際シンポジウム）に３名を派遣研究員として派遣する。３名のうち、２名に対しては、各15万円の助成金を与える。

(2)今後の、人選等の決定にあたっては、交流委員会から推薦し、その決定は理事会で行うものとする。その際、幹事会にも連絡する。

(3)今年度海外派遣研究員の人選においては、下記の基準に基づいて実施した。来年度以降は、これを募集時に明示する等とした。

［交流委員会・派遣研究員選考基準］

〔資格〕応用生態工学に興味をもつ以下の者

1.学生や35歳未満の大学・研究機関研究者
2.技術者
3.その他

で、応用生態工学研究会の正会員

〔適性を判断する項目〕

1. 派遣対象となる会議のテーマと本人のバックグラウンド（研究・調査経験）の合致性
2. 派遣対象となる会議で何を学ぼうとしているのかの焦点を明確に述べているか否か
3. 国際会議に出席して内容を把握できる能力の推定（海外経験など）
4. 応用生態工学への関心の度合い

（以上を本人の作文から判断）

その他の項目：

5. 応用生態工学研究会での活躍歴

〔派遣研究員の選考〕

1. 上記適性基準での評価値の高いものから順に、現状（総額30万円）では、2名に渡航助成する。
2. 適性基準を満たすものについては、渡航助成ができない者も「応用生態工学研究会派遣研究員」と認定する（当人は辞退できる）。

4) 奨励研究募集（７月31日まで）

昨年に引き続き、奨励研究募集を開始する。研究会からは、１件30万円程度（３件程度）の奨励金を支給する。

5) 講座セミナー等の開催

(1)５月26日に仙台基礎講座実施（186名参加）。

(2)今後、札幌・矢作川で「多自然型川づくり」に関する現地研究討論会を計画する。

(3)10月９日（月）、第４回総会･研究発表会に合わせて、琵琶湖現地見学会を計画する。

(4)「多自然型川づくり」に関するタイトルについては、『応用生態工学・現地ワークショップ』を全体タイトルとして、その下に「多自然型川づくり」のシリーズとしてサブタイトルを付ける。

6) 会誌編集

(1)３巻１号は、１ヶ月ほど遅れたが、６月末に発行する。

(2)３巻２号は、特集タイトル「魚道の思想・機能評価・今後の魚道の在り方」を編集中である。

7) 国際交流

(1)申請していた河川整備基金は、６月１日助成が決定された。助成事業名「応用生態工学の国際的ネットワーク構築」。

(2)公開シンポジウム『健全な生態系とはなにか－評価と回復のために－』を10月７日午後に琵琶湖博物館で総会、研究発表会にあわせて開催する。

ミキサー：橘川次郎（オーストラリア，ク

イーンズランド大学）
話題提供：J. Karr（米国ワシントン大学）、
大森浩二（愛媛大学）、
島谷幸宏（建設省土木研究所）

8) 琵琶湖大会
(1)10月７日（土）～９日（月）に、第４回総会・研究発表会を滋賀県立琵琶湖博物館において開催する。ここでは合わせて、公開シンポジウム「健全な生態系とはなにか－評価と回復のために－」（10/７）、および琵琶湖現地見学会（10/９）を開催する。
(2)この琵琶湖大会を実施するに当たっては、「応用生態工学研究会琵琶湖大会運営委員会」（運営委員長谷田一三幹事長）を組織し、そのもとに「琵琶湖大会実行委員会」を設置する。
(3)実行委員は、関西在住会員を中心として参加希望者を募る。
(4)各参加料は、例年通りとする。但し、公開シンポジウムは河川整備基金の助成を受けるため無料とする。

9) 後援・共催・協賛の扱い
(1)後援・共催については、その採択の基準として、
①当研究会の目的にあう主催者（団体等）であること、
②当研究会の目的にあう行事内容であること、
③政治的、営利的、個人的な性格のあるものは除く、
ものとする。
(2)採択や、委員派遣などを迅速に行うため、幹事長および交流委員長がその判断をして、事務局にその関連作業を指示する。同時に、理事会及び幹事会各メンバーに連絡するとともに、次の幹事会・理事会において報告する。
(3)賛助金などの支出を伴う協賛については、交流委員会及び理事会の承認を必要とする。

10) 会員名簿
(1)会員名簿（第１号）を発行する。（今年10月予定）
(2)名簿には、広告を掲載し、研究会の本体予算を極力支出しない。
(3) 会員には、無料で配布する。

11) 年会費の銀行自動引き落とし
(1)自動引き落としのための費用及び作業がかさむため、2001年度開始は見送る。

12) 会費未納者の扱い
98年度からの年会費未納者（約60名）には、最新のニュースレター発送時に「未納の場合は退会」処理をすることを明示して、回答などがない場合は自動的に退会として処理する。

13) 平成12年度予算案
(1)前年度（平成11年度）と同様規模の予算とする。
(2)河川整備基金の助成金は、独立会計とするが、全体予算に組み込む。
(3)琵琶湖大会費用も含めて予算を立て事前に理事会の承認を得てから、第４回総会に提案する。

２．仙台基礎講座「水域の環境改変と生物群集」開催報告

2000年５月26日（金）、東北大学艮陵会館（仙台市）において開催された仙台基礎講座「水域の環境改変と生物群集」について報告します。

本研究会の講座は東北地方では初めてでしたが、実行委員会の目標とした160人を上回る186名の参加者があり、大変盛況な講座となりました。参加者の所属は、コンサルタント会社、建設会社、官公庁、大学関係者など幅広い層からの参加が得られました。また専門分野としては、生物・環境系と土木系の参加者が約半々であり、生物学と土木工学の学際領域をテーマとする本研究会の目的にも合致した講座を開催することができました。

講座では、５名の講師より標記テーマに沿って以下の講義が行われました。

小野勇一先生：「自然環境と応用生態工学」
応用生態工学が対象とする自然に関する説明があり、等身大の自然管理によってつくられる人工的自然である里山を例に、その保全の考え方について述べられた。

西平守孝先生：「生息場所改変と生物群集の保全」
生物の生息空間は生物がつくるという「住み込み連鎖」の概念と、群集保全策の考え方を、サンゴ礁を例に分かりやすく解説して頂いた。

内藤俊彦先生：「伊豆沼生態系の現状と保護管理」
我が国で二番目にラムサール条約の指定・登録地となった宮城県伊豆沼・内沼湖沼群を例に、周辺生態系の現状と問題点を指摘するとともに、保護対策の具体事例が紹介されました。

鈴木孝男先生：「防潮水門が底生動物の分布に及ぼす影響」
宮城県名取川河口に形成される干潟に設置された防潮水門が生息環境の分断となり、水門の設置前後で底生動物群集がどの様に変化したかについて、詳細な調査結果に基づいて説明されました。

小笠原暠先生：「河川改修と河川生物の保護・保全

ー雄物川の現状と問題点」

秋田県雄物川を例に、ワンドの環境とそこに生息するイバラトミヨの生息実態が紹介されました。また、ワンド、中州、河畔林が生物の生息環境として重要であり、河川改修にあたっては、生態的配慮が必要であることが説明された。

以上が各講座の概要ですが、いくつかの講座で現状の問題点として、野生生物に対する給餌行為が指摘されました。講座後のミニディスカッションでは、観光資源としての地域振興、地域住民の収入源などの問題があり、直ちに辞めさせることはできないが、「野生生物には餌を与えないことが原則」ということで意見が一致しました。

今回の受講者に対して行ったアンケート結果では、「知見が広まった」、「基礎的知識・情報が修得できた」などの意見が多くありました。また、今後の企画・講座についての要望では、「ビオトープ、多自然型川づくり等に関する土木・工学分野からみた事例紹介」を望む声が多く寄せられ、本研究会が今後東北地方で行う研究活動テーマとして検討する際に参考になるものと思われます。

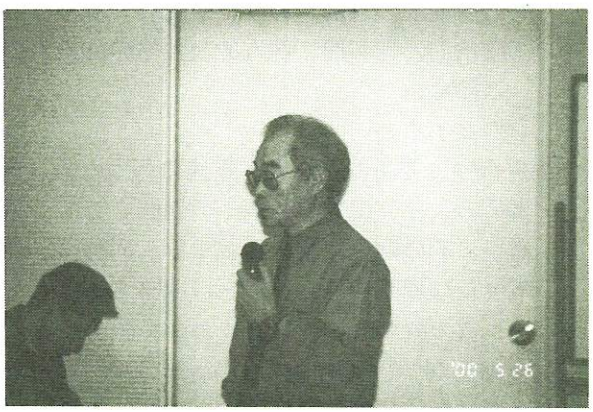
最後になりましたが、仙台研究実行委員会（10社､18名）を代表して、有意義な講義をして頂いた講師の方々と、本講座に参加して頂いた方々にお礼を申し上げます。

仙台研究実行委員会　橋本　正志（(株)復建技術コンサルタント）

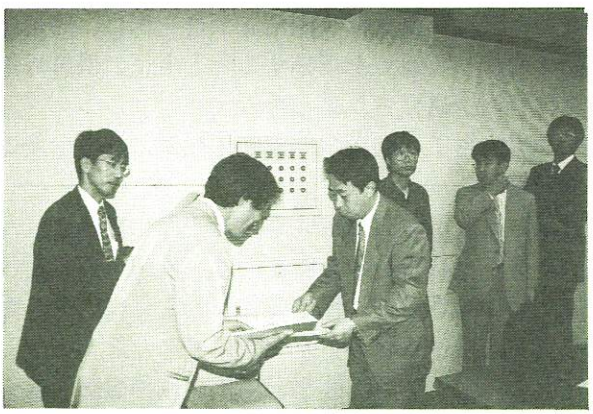
・小野担当役員の講義風景

・西平講座主任の講義風景

・内藤講師の講義風景



・講義をする小笠原講師



・鈴木講師から修了証授与

・会場からの質問

No.

修了証

殿

あなたは、応用生態工学研究会 仙台基礎講座「水域の環境改変と生物群集」を受講され、熱心に学ばれましたので、ここに修了を認めます。

2000年5月26日

応用生態工学研究会
講座主任　西平　守孝
会　長　川那部 浩哉

「水域の環境改変と生物群集」

開催日：2000年5月26日㈮
会　場：東北大学医学部「艮陵会館」

- 小野 勇一（九州大学名誉教授）「自然環境と応用生態工学」
- 西平 守孝（東北大学）「生息場所改変と生物群集の保全」
- 内藤 俊彦（東北大学）「伊豆沼生態系の現状と保護管理－1」
  「伊豆沼生態系の現状と保護管理－2」
- 鈴木 孝男（東北大学）「防潮水門が底生動物の分布に及ぼす影響」
- 小笠原 暠（秋田大学）「河川改修と河川生物の保護・保全 ―雄物川の現状と問題点」

３．琵琶湖大会開催案内

2000年（平成12年）10月７日～９日、琵琶湖大会を開催します。

研究発表会の一般講演の受付を始めます。研究発表会では、研究成果と共に、現場で抱えている課題や問題提起、プロジェクト提案そして自由な発言の場です。会員の皆様の研究発表をお待ちしております。

10月７日には、公開シンポジウム『健全な生態系とはなにかー評価と回復のためにー』を開催します。これは、応用生態工学研究会が国際交流の一環として開催するもので、河川整備基金の助成を受けています。話題提供者など（予定）は次のとおりです。

ミキサー：橘川次郎（オーストラリア、クイーンズランド大学）

話題提供：J.Karr（米国、ワシントン大学）
島谷幸宏（建設省、土木研究所）
大森浩二（愛媛大学）

そして、10月９日（月）―体育の日―には、琵琶湖の現地見学を行いますので、是非御参加下さい。

【応用生態工学研究会琵琶湖大会】
2000年10月７日（土）～９日（月）
- **第４回総会：**
  10月７日（土）13:30～14:15
- **第４回研究発表会：**
  10月７日（土）10:00～10月８日（日）
  17:00まで
- **公開シンポジウム『健全な生態系とはなにかー評価と回復のためにー』：**
  10月７日（土）14:30～17:30

【会場】滋賀県立琵琶湖博物館（ホール、定員246名）
〒525-0001　滋賀県草津市下物町1091
TEL.077-568-4811
（JR琵琶湖線「草津駅」下車、バス約25分「琵琶湖博物館前」下車）
- **琵琶湖現地見学会：**10月９日(月)9:00～15:30
  （JR長浜駅集合解散）
  琵琶湖竹生島及び姉川人工河川見学

（１）スケジュール（詳細は後日）

10月７日（土）――１日目――
［ 8:00～　会誌編集委員会］
9:00　（ホール開場、受付開始）
［ 9:00～　幹事会］
10:00　・第4回研究発表会（一般講演）
［12:00～　理事会］
13:30　・第４回総会
□総会議長選出
□議事（会長挨拶、99事業報告、99決算報告、99監査報告、2000年度事業計画、2000年度予算、その他）
14:15　（総会閉会）
14:30　・公開シンポジウム『健全な生態系とはなにかー評価と回復のためにー』
（参加無料）同時通訳を用意します。
17:30　・懇親会（同館レストラン「にほのうみ」）
19:30（1日目終了）

10月8日（日）――2日目――
9:00　・第4回研究発表会（一般講演）
14:30　・琵琶湖ミニシンポジウム
17:00（2日目終了）

10月9日（月）――3日目（体育の日）――
9:00　JR北陸本線「長浜駅」集合
・観光船及びバスにて琵琶湖竹生島及び姉川人工河川（アユ孵化場）現地見学
15:30　JR「長浜駅」現地解散（JR米原駅解散案有り）
（３日間で終了）

（２）研究発表会一般講演募集

第４回研究発表会では、応用生態工学に関わる研究報告、研究プロジェクト提案などの一般講演を受付けます。下記要領に基づき応募して下さい。

なお、応募された一般講演については、その採択等について大会実行委員会において審査いたします。

〔１〕講演内容

一般講演に応募できる講演内容は、応用生態工学に関する調査報告、研究報告、事例報告、研究プロジェクト提案、および自由課題。

〔２〕講演時間

講演時間は、１課題当たり15分（発表12分、討論３分）程度を予定。

〔３〕講演申込（７月31日まで）

一般講演を申込みされる方は、Ａ４版用紙１枚、形式自由、ただし下記事項を記入の上、事務局まで郵便、FAX、E-mailで送る。後日事務局より受付の確認連絡。

――講演申込記入事項――
①講演者名および共同発表者名と各々の所属（会員番号）
②講演題目
③連絡先（〒、住所、氏名、TEL、FAX、E-mail）
④講演概要（和文200字程度）
⑤キーワード（対象地域・対象生物を含め５つ程度）
［対象地域の例］河川全域、河川上流（＝渓流）、

河川中流、河川下流（河口含む）、湖沼、海域、森林、水田、畑地、道路、都市、農村、等

［対象生物の例］生態系全体、陸上植物、陸上動物、水生植物、底生動物、鳥類、魚類、等

〔４〕講演要旨原稿の提出（8月31日まで）

一般講演者は、講演要旨原稿（Ａ４版４枚以内）を期日までに事務局へ提出。原稿は下記の要領に従って作成。

――講演要旨原稿作成要領――

・Ａ４版縦、４枚以内
・左右15㎜以上、上下18㎜以上余白
・横一段組みにて中央に「講演題目」を和文にて、14ポイント程度の文字、２行で記入
・題目の下１行空け右寄せで「講演者名、共同発表者名、各々の所属」を、12ポイント程度の文字で記入
・本文は、10ポイント程度・明朝
・原稿はそのまま印刷できるようプリントし、図表等を張り付けたオリジナルとそのコピーを１部提出。印刷は白黒。

〔５〕講演者資格

講演者は、応用生態工学研究会の正会員、学生会員、および賛助会員法人に所属する個人。

なお、共同発表者については非会員であってもいい。講演者が学生の場合、共同発表者に会員が含まれていれば発表可能です。

（３）参加料

一般参加者および講演者ともに下記参加料とします。

●研究発表会参加料：

正会員・賛助会員	5,000円
学生会員	2,000円
非会員	7,000円
学生非会員	3,000円

●懇親会参加料（一律）　3,000円
●琵琶湖現地見学会（一律）5,000円

注１）10月７日総会のみ出席する正会員は、無料。
注２）10月７日公開シンポジウムは、河川整備基金の助成を受けており参加料は無料。
注３）研究発表会参加料には、当日配布する講演集費用を含む。但し、講演集のみ入手希望の方には、2,000円で販売。
注４）合計参加料は、参加者名を明記の上、下記指定口座に振り込んで下さい。
注５）交通手段及び宿泊関係は各自で手配して下さい。
注６）研究発表会・公開シンポジウムはホールの定員（246名）、現地見学会は遊覧船の定員（100名程度）で締め切りますので、参加希望者は早めに申し込み下さい。

【受付期限】

1. 第４回研究発表会･一般講演申込受付期限：2000年７月31日（月）消印有効
2. 第４回研究発表会･一般講演要旨原稿提出期限：2000年８月31日（木）消印有効
3. 第４回総会･研究発表会参加申込受付期限：2000年９月10日（日）消印有効
4. 公開シンポジウム（10/７）参加申込（無料）受付期限：2000年９月10日（日）消印有効
5. 琵琶湖現地見学会（10/９）参加申込受付期限：2000年９月10日（日）消印有効

（参加料は、2000年９月20日までに指定口座に振込み下さい）

【申込み及び問い合わせ先】

応用生態工学研究会事務局
〒102-0083　東京都千代田区麹町4-5第７麹町ビル226号室
TEL.03-5216-8401　FAX.03-5216-8520
E-mail：see@blue.ocn.ne.jp

【指定口座】

・郵便振替口座
（口座名義）応用生態工学研究会
（口座番号）００１４０－７－４０４２７５
・銀行口座
（口座名称）応用生態工学研究会 熊野可文
（銀行名）　あさひ銀行麹町支店
（口座番号）普通３６８６７２８

注）指定口座に振り込む場合、参加する個人名が分かるようにして下さい。

４．奨励研究募集

応用生態工学研究会では、昨年度に引き続き今年度（2000年度）も奨励研究の募集を実施することになりました。下記募集要領に従い、事務局まで申込んで下さい。

―――奨励研究募集要領―――

1)課　題：応用生態工学にかかわる研究・提案
2)対象者：会員（正・学生会員及び賛助会員）の実務者・若手研究者（自ら研究計画を立案しそれを実行できる会員）の個人あるいはグループ
3)費　用：１件30万程度（３件程度、研究会より支給）
4)スケジュール：
2000年６月　・ニュースレターNo.11で募集開始

７月31日・募集締め切り、［奨励研究申請書］提出
８月末　・採択決定（研究開発委員会で審査、理事会で決定）
９月１日～2001年８月31日を研究作業期間とする。
2001年８月31日・研究報告概要及び会計報告提出。
2002年４月30日・研究報告書提出。

5)奨励研究申請書：書式自由。但し下記事項を必ず記入すること。A４版計２枚程度で提出。
①会員番号、氏名、所属、連絡先（〒、住所、TEL、FAX、E-mail）。グループの場合は、参加者全氏名、所属および代表者名を明示。
②予算書（備品、消耗品、旅費などを区別して、研究計画との関連が分かり易いように書く）
③研究計画書［Ａ４一枚程度］（研究課題、目的、方法、成果の見通し、応用生態工学への貢献など）

５．会誌編集委員会報告

会誌編集委員長　竹門　康弘（大阪府立大学）

今月末に「応用生態工学」３巻１号が発行の運びとなりました。７月上旬には会員の皆様のお手元に届くかと存じます。１ヶ月以上の遅れのとなり、皆様にご迷惑をおかけいたしましたことお詫びいたします。

以下、会誌編集の現状報告です。

１）会誌発行予定

・３巻１号発行：2000年６月末 発行予定（６月21日現在校正中）

計15本（原著論文３本、総説５本、短報１本、意見４本、用語案内１本、特集序文１本）

３巻１号目次：

１．原著論文「Censusing waterfowl at a dam lake」森貴久・川西・Sodhi・山岸哲
２．原著論文「The relationship between waterfowl community structure and characteristics of dam lakes in Kinki district, central Japan」森貴久・川西・Sodhi・山岸哲
３．総説「河川域におけるカニ類の分布様式と生態」小林哲
４．短報「落差工の改善とヤマメの放流実験」多胡治・織田沢勲・林不二雄
５．特集　序文「日本の沿岸環境保全における応用生態工学の展望」清野聡子
６．特集　原著論文「カブトガニ産卵場の地形特性とふ化幼生の分散観測」清野聡子・宇多高明・土屋康文・前田耕作・三波俊郎
７．特集　総説「水産工学は海岸生態系保全に何ができるか」谷野賢二
８．特集　総説「海岸事業と生態系保全の問題点」鳥居謙一・加藤史訓・宇多高明
９．特集　総説「漁港漁村整備における生態系保全の考え方」長野章
10．特集　総説「海岸生態系研究におけるアマチュアリズムと保全活動」山下博由
11．特集　意見「新しい海岸制度のスタート」岸田弘之
12．特集　意見「海岸植物生態学研究と環境保全―ナホトカ号重油流出事故後の海岸植生モニタリングを例として」古池博
13．特集　意見「地域発の沿岸生態系保全研究」工藤孝浩
14．用語案内「「わんど」および「たまり」(backwater)」島谷幸宏
15．意見「実務的な発表（論文）を活性化するための一提案」古川整治
16．研究会記事　事務局

・３巻２号発行：2000年11月末 発行予定

既投稿済みで現在校閲中もしくは修正中の報文
原著論文３本、意見集「多自然型川づくり」１本
現在依頼中の報文　総説１本、特集報文（原著論文あるいは総説５本、総説あるいは意見７本）

原稿締切　原著論文は７月21日（金）、総説・短報は７月28日（金）、意見は８月４日（金）に延期。

特集企画書（2000年６月14日現在）

特集タイトル「魚道の思想・機能評価・今後の魚道の在り方」

担当編集委員：森　誠一（岐阜経済大学）

趣旨：魚道の設計思想、個別の事例における機能評価と技術的問題点、現在の魚道に対する多様な捉え方などを念頭に置きながら、これまで知見を整理し、今後の魚道の在り方について提言する。

特集の構成（合計で刷り上がり70～80頁程度を想定する）

１．水野信彦
総説「魚類生態学の視点からみた魚道」（仮題）
２．中村俊六（豊橋科学技術大学）
総説「魚道維新その後」
３．和田吉弘（中京女子大学）
総説「これまでの魚道の考え方」（仮題）
４．東信行（弘前大学農学生命科学部）
総説「魚の行動から見た魚道と河川横断構造物」（仮題）

５．高橋剛一郎（富山県立大学）
総説：「魚道の評価をめぐって」（仮題）
６．森川一郎（財団法人リバーフロント整備センター）
総説「魚がのぼりやすい川づくりの現状と課題」
７．前川勝朗（山形大学農学部）
原著「農業水利学の視点からみた魚道」（仮題）
８．端憲二（農業工学研究所農村整備部集落排水システム研究室）
原著あるいは総説「田圃につけた小さな魚道」（仮題）
９．常住直人（北陸試験場水田利用部）
原著「農業利水との調和に配慮した取水セキ付設魚道の実験的検討」
10．新村安雄（サツキマス研究会）ほか
原著「長良川河口堰におけるアユの遡上・降下実態」（仮題）
11．竹門康弘（大阪府大）ほか
原著「長良川河口堰におけるモクズガニの遡上・降下実態」（仮題）
12．森　誠一（岐阜経済大学）
総説「必要な魚道、不要な魚道」

２）４巻１号以降の編集方針（特に特集の方針と原著論文依頼）

「多自然型川づくりの評価－今後の河川管理のあり方」（辻本・池内ほか）

「里山とビオトープ考」（担当編集者募集！）
陸上生態系についての特集にかなりの期待が寄せられています。

「河口堰の評価」（竹門・足立ほか）
来年の研究発表会でもシンポジウムを組めればよいと考えています。

その他、皆様のアイデアをご披露ください。

３）第６回編集委員会開催案内

本年度第４回研究発表会に先立ち、第６回編集委員会を10月7日朝 8:00～ 9:00に琵琶湖博物館にて開催する予定です。議題は４巻１号と２号の編集方針の決定など。

６．いろいろなニュース

新著紹介

・「特集：地球温暖化と陸水環境」、花里孝幸、吉岡崇仁編著、陸水学雑誌61巻１号、日本陸水学会発行：日本陸水学会63回大会（松本市）で開催されたシンポジウム「地球温暖化と陸水環境－温暖化は陸水環境をどう変えるか－」をもとにした総説７編からなる特集である。地球温暖化は、地球環境問題の重要な課題で、その影響は様々な対象について論じられてきたが、淡水域を中心とした陸水環境に与える影響の予測をまとめた日本語のテキストはなかったように思う。７編のなかには興味深い力作が多い。陸水水温、地下の熱環境変化、河川の水文特性、陸水水質、湖沼プランクトン群集、淡水魚類群集への影響が、それぞれまとめられ、最後に吉岡さんによる集水域研究の重要性を指摘したまとめがついている。淡水魚類群集については、谷口さんと京都大学生態学研究センターの中野さんの共著の総説は、評者の専門分野に近いせいか、とくに興味深く読んだ。冷水性のサケ科魚類の生息域の現象と分断化は、中野さんの論文で詳しく論じられていたが、生理的特性の変化、遺伝的組成の変化、群集内の生物的相互作用などが、水温を介して働くなど、視点は大きく広がっている。新井さんは、温暖化の長期記録として諏訪湖の結氷（お神渡り）に着目して、エルニーニョなどとの関連を分析している。正確な河川水温の記録の少ないことも指摘している。今回具体的に紹介しなかった総説にも、おもしろいものはある。会員以外の購入については、学会の事務局へ申し込むことになる。［谷田一三］

・「河口堰」、村上哲生、西條八束、奥田節夫、講談社、本体1900円：最近は長良川河口堰を中心に生物や水質などを調べてきた３名の科学者の研究の集成。とくに名古屋市環境科学研究所で自治体研究者として長良川の生態を地道に研究を続けてきた村上さん（最近に名古屋女子大学に転出）自身の研究史が、彼特有の語り口で語られ、それにも引き込まれて一気に読んでしまった。日本では発生しないとされてきたポタモ（河川）プランクトンの発見と、それが河川の流水で再生産をする浮遊藻類であることを確認するための地道な努力。全国レベルの河川プランクトン調査への展開。学術論文では多少は知っていた内容が、一般読者にも判りやすく書かれている。また、堰の運用後も、BODから見る限りは長良川下流の水質基準は達成されているものの、生態系をドライブする有機物、窒素、リンから見れば、水質（広い意味の）にも問題が多いとの指摘には、納得できる部分が多い。湖沼はCOD、河川はBODと、水質の環境基準の違うことや、昼間の溶存酸素がなにを示すのか、生態系にとって重要な栄養塩が水質環境として無視されていること、評者も常々思ってきた疑問が、明解に率直に示されている。河口堰の本題とは、少々はずれるが、重要な指摘である。建設省などによる河川の管理方針は今大きな転機を迎えている。環境庁が主管である河川や湖沼の水質の環境基準も再検討するべき時期になっているのだろう。水中だけでなく、川底の堆積物にも着目しなければならないとの著者達の指摘もあまりに当然のことである。河口堰に対して賛成、反対を問わず、

また研究者、技術者、学生、市民、いずれの人にも一読を進めたい好著である。［谷田一三］

・「砂の魔術師アリジゴク、進化する捕食行動」、松良俊明、中公新書1524、本体780円：カマキリからアリジゴクへ、捕食性昆虫にとりつかれた松良さんが、自分自身の研究と他のアリジゴク研究者の研究成果を、分かりやすくまとめられている。最近でこそ身近に見ることが少ないが、アリジゴクはその独特の巣穴から馴染みの深い昆虫だあろう。評者自身は、松良さんらと共同調査している木津川の河原で、ひさしぶりに無数のアリジゴクの巣穴をみた。しかし、身近な昆虫アリジゴクについて、この本から意外な発見を数多くえた。京都大学におられた森下正明さんの「環境密度理論」は、アリジゴクを使って打ち立てられた理論で、その美しさと着眼のおもしろさから、評者も授業で紹介してきた。どこにでもいるこの種を、森下さんに従ってホシウスバカゲロウの幼虫と紹介してきたが、この種類はすり鉢状の巣穴は作らないとのこと、クロコウスバカゲロウが正しい名前と教えられた。寺社の縁側の下に巣穴をつくるのは、これより大型のウスバカゲロウだそうだ。ホシウスバカゲロウと誤同定されたのは、アリジゴクを最初にまとめた精神科医であり著名な昆虫学者でもあった馬場金太郎さんの「蟻地獄の生物誌」の誤りに起因するようだ。本書の、巣穴形成方法や砂と巣穴の物理学もおもしろかった。後半は、松良さんのオーストラリアでのアリジゴクの観察と研究の紹介。特殊な生息場所を舞台にした、溝掘りアリジゴクの生態や進化の話も、なかなかにおもしろかった。生物学の研究者、学生以外の方々にも一読を勧める。［谷田一三］

・「南極発・地球環境レポート、異変観測の最前線から」、斉藤清明、中公新書1519、本体660円：京都大学山岳部の出身で、毎日新聞の記者としてチベット、ヒマラヤと登山の極地を訪ね歩いてきた著者の南極レポート。南極は探検の時代から観測の時代に移っていることは重々知っていたが、環境問題への関心の高い斉藤さんのレポートで南極観測の新時代に触れることができた。今回の紀行のハイライトは、昭和基地から内陸へ1000km入ったドームふじへの旅行。雪上車の旅で片道17日もかかるという。この内陸基地にも越冬隊が入り、氷床の深層掘削などの観測が進められていた。標高3800m、そのうち氷床の厚さが3000m、南極最高所の越冬基地だそうだ。この厚い氷床は、過去の地球環境の歴史を閉じ込めた冷凍庫。深さで2500mまで掘り進むと、過去35万年の歴史が解析の対象になる。氷河時代の大半をカバーすることになるという。それ以外の観測隊の生活の模様は、食事も含めて興味深い。さすが、食通で酒も大好きな斉藤さんの報告である。生活とも関係するが、深刻な南極自身の環境問題は、過去の観測隊のものも含めた廃棄物の処理である。内陸の基地からの空のドラム缶の輸送や、観測船へのゴミの搬入。努力は認めるが、南緯60度の南極地域を北へ越えたとたんの洋上投棄は頂けない。短かい本ながら、学術的な内容、基地と観測隊の生活の様子、上手にまとめてある。［谷田一三］

７．事務局報告

2000年度が始まり、そのスケジュールが思ったより早く決まって来ました。会員の皆様の参加をお待ちしております。

会員数は、1,000名に近づきましたが、98年度からの会費未納者が多く、その処理によっては900名くらいになってしまいます。ただし、2000年度の新入会者が41名となり、昨年に比べるとかなりはやいペースです。是非、今年は入会者を増やし、会員1,000名にしたいと考えております。まだまだ「応用生態工学研究会」を知らない方が多いと思います。会員の皆様には、知人・同僚への入会要請をお願い申し上げます。

〔2000年６月28日現在会員数〕

正（学生）会員	976名
賛助会員	60法人

〔研究会活動〕

2000年（平成12年）

- 2.16　仙台にて基礎講座準備打ち合わせ
- 2.29　ニュースレターNo.10発行、全会員に会員名簿記載内容の確認と、2000年度年会費請求を送る。
- 3. 8　朝日新聞社「第１回明日への環境賞」贈呈式に招待され事務局長が参加。「霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議」が受賞。
- 3.20　国際交流･海外学会等派遣者募集申込み期限。４名応募。
- 3.22　(株)建設技術研究所と事務局長熊野可文氏の出向2年延長（平成14年３月31日まで）の覚書を交わす。
- 3.30　第３回交流委員会開催（麹町会議室）2000年度海外学会への派遣者などを検討等。
- 4. 1　（2000年度開始）
- 4.21　交流委員会より「2000年度海外学会等派遣者採択について（修正報告）」を理事会に報告。

4.19～21　応用生態工学研究会主催「仙台基礎講座『水域の環境改変と生物群集』」及び水環境学会九州支部主催（応用生態工学研究会共催）「シリーズ講習会『水域生態系保全・創造のコンセプトと展開の技術』」の案内書を全会員に配布。

4.24　シリーズ講習会について水環境学会九州支部事務局と実施打ち合わせ（西日本技術開発(株)会議室）

5. 1　理事会・幹事会全メンバーに、「第３回東京湾海洋環境シンポジウム」の共催、東京大学大学院農学生命科学研究科生圏システム学専攻主催「自然の中で科学する－生圏システム学へのいざないー」の後援の要請について了解確認の連絡。

5. 9　仙台実行委員会（東北大学医学部艮陵会館）実施打ち合わせ

5.20　水環境学会九州支部主催（応用生態工学研究会共催）「シリーズ講習会『水域生態系保全・創造のコンセプトと展開の技術』」（九州大学国際ホール）第１回開催、138名受講申し込み、99名参加。

5.26　応用生態工学研究会主催「仙台基礎講座『水域の環境改変と生物群集』」（東北大学医学部艮陵会館）開催。221名受講申し込み。186名参加。

5.30　第12回幹事会（大阪府立大学谷田研究室）2000年度事業計画検討（講座、琵琶湖大会等）

6. 1　河川整備基金助成決定。
助成事業名「応用生態工学の国際的ネットワーク構築」助成金1,500,000円。

6. 3　琵琶湖大会企画会議（ニューオーサカホテル会議室）実施体制検討

6. 8　「第３回東京湾海洋環境シンポジウム実行委員会」（東京水産大学）
応用生態工学研究会共催（派遣委員：國井秀伸/島根大学、渡辺晋／新日本気象海洋(株)）

6. 8～9　土木学会基礎水理部会主催「2000年度 新しい河川整備・管理の理念とそれを支援する河川技術に関するシンポジウム」（芝浦工業大学）

6. 9　(財)リバーフロント整備センター主催「河川生態環境評価に関する講演会～矢作川水系乙川を研究モデル河川として～」
場所：愛知県産業会館　本館４階第４会議室

6.16　第11回理事会（麹町会議室）1999年度決算、2000年度事業計画（講座、シンポ、総会・研究発表会、琵琶湖現地見学会、奨励研究、海外派遣、国際公開シンポ等）

6.17　第２回「シリーズ講習会『水域生態系保全・創造のコンセプトと展開の技術』」（九州大学）
「生態系の機能と構造その１－沿岸域」風呂田利夫（東邦大学教授）、92名参加。

6.30　ニュースレターNo.11発行（琵琶湖大会案内・一般講演募集、奨励研究募集等）

（以下予定）

7.　会誌「応用生態工学」３巻１号発行

7. 6　東京大学大学院農学生命科学研究科生圏システム学専攻主催「自然の中で科学する－生圏システム学へのいざないー」（東京大学弥生講堂）13:30～17:00、応用生態工学研究会後援

7.17～21　EISORS（フランス・ツールーズ）３名派遣

7.21　会誌「応用生態工学」３巻２号、原著論文、原稿〆切

7.28　会誌「応用生態工学」３巻２号、総説・短報、原稿〆切

7.31　第４回研究発表会、一般講演申込受付期限

7.31　「奨励研究」募集〆切

8. 4　会誌「応用生態工学」３巻２号、意見、原稿〆切

8.31　第４回研究発表会、一般講演要旨原稿提出期限

9.10　第４回総会・研究発表会、公開シンポジウム、琵琶湖現地見学会参加申込受付期限

9.23～24　「応用生態工学・現地ワークショップin札幌『多自然型川づくりーその評価と今後の展望ー』」（札幌）

10. 6　(財)ダム水源地環境整備センター主催『第３回水源地生態研究セミナー』（京都）

10. 7～9　琵琶湖大会（滋賀県立琵琶湖博物館）

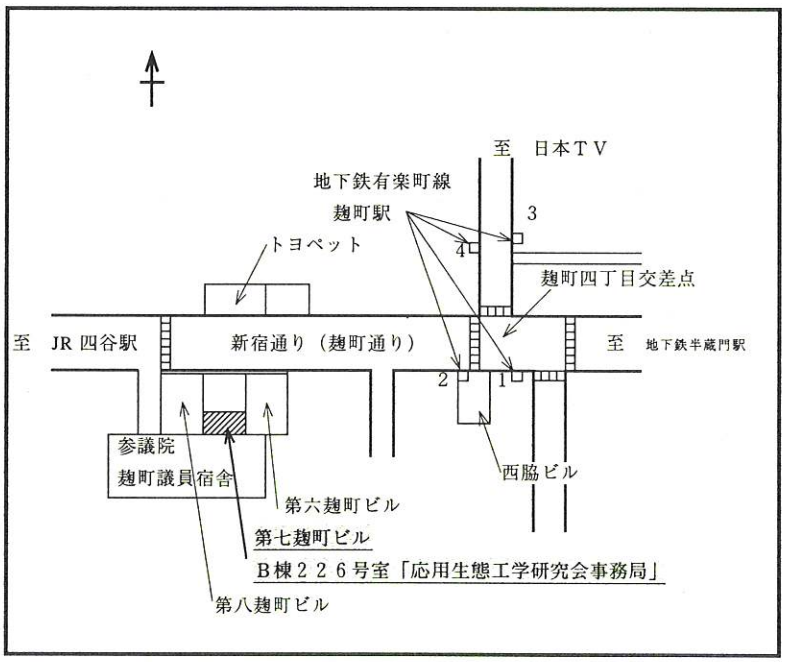
10. 7（土）会誌編集委員会・幹事会・理事会、第４回総会・研究発表会
公開シンポジウム『健全な生態系とは何かー評価と回復のために』

10. 8（日）第４回研究発表会

10. 9（月）琵琶湖現地見学会

10月　「応用生態工学・現地ワークショップin矢作川（仮称）」

11月　会誌「応用生態工学」３巻２号発行



応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町４－５　第七麹町ビル（２Ｆ 226号室）

TEL. 03-5216-8401　　FAX. 03-5216-8520

Ｅ-mail: see @ blue.ocn.ne.jp　　ホームページ:http://www.ecesj.com/

〔地下鉄有楽町線麹町駅２番出口徒歩３分〕
〔地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩７分〕
〔ＪＲ中央線四ツ谷駅徒歩10分〕

2000.6.30・2200